

京大宇治分校に通った頃

渡辺信三

今度 京大数学教室の同窓会が発足することとなり、そこで生れ育た 数多くの先輩、同輩、後輩の関係や 師弟関係等が なつかしく思い返されることであろう。私も与えられたこの機会を利用して そのような思い出の一つを記したい。

私が京都大学理学部に入学したのは1954年で、最初の一年間は 教養部の宇治分校において学んだ。朝早く京阪電車で一時間以上をかけて通学し、夕方暗くなるころ帰宅するというしんどい日々が続いたが、それは又、あこがれの京都大学に入学し高度の学問を学ぶという喜びに満ちた日々であった。とくどきに今は亡き滝澤精二先生から 数学C という線型代数の入門を主要内容とする科目を教わった。これは私にとって生涯忘れられない授業の一つとなった。

私はこの科目の担当が滝澤先生と知ったとき 大変驚いた。というのはその6年前、私が京都

教育大附属中学の一年生のとき、先生から数学を学んだからである。当時先生は京大数学科を卒業され直ちに附属中へ赴任されたのであった。その頃、附属小や附属中の教師は旧制京都師範出身のベテラン教師が大部分を占めていたが、新制中学の発足に伴い、先生は優秀な京大出身の教師としてリクルートされたものと思われる。しかし新米教師である先生は学識では優れていても、教育技術では師範出身のベテラン教師に及ばず、生意気ざかりの中学生相手に何かと御苦労の多い一年間であったと察せられる。先生は、数学では記憶することより、よく考えよく推理して本質を理解することが大切だ」ということを絶えず教えてこられたが、未熟な中学生には存か存か理解されず、スイリ(推理)という渾名をつけられ、騒しくて乱れた授業に存ることが多かった。それでも私達の何人かは、熱心に本質を伝えようとする先生の授業に魅せられ、連れ立って放課後の職員室に先生を訪れ、判らなかつた所の説明をもう一度お願いしたものだった。そのとき先生は、職員室で隙な時にはいつも読み耽っておられた数学の専門書から目を離し、私達の質問に親切に

答えて下さった。そのときの先生の授業中にはあまりお見せに存らなかつたうれしそうな表情が今でも忘れられない。

その滝澤先生に6年後、宇治分校の授業で再会したのだった。先生の数学Cの講義は高校数学から一変し、線型空間、線型写像、1次独立、同型、...等、現代数学を形作る抽象概念が次々と現れ、これによって理論体系が出来上っていく様子に魅せられた。その頃、遠山啓氏の岩波新書「無限と連続」が著され、私も現代数学に関心を持ち始めたが、先生の数学Cの講義でさらに惹きつけられ、2年後の教室分属で数学科を選ぶという道を進んでしまった。

この滝澤先生の講義で忘れられないのは、先生がその中でルペール (repère) という用語を用いておられたことである。線型空間の基底のことだが、当時まだフランス語を知らなかつた私には、このアクセントの外国語は何か目新しい、新鮮なものに思われた。後年、私の専門研究分野において「確率動標構」という概念が重要になりそれをよく利用したが、始めてこの概念を学んだのはフランス語の文庫で

それが「repère mobile stochastique」と
書かれてゐるのを見て 直ちに滝澤先生の数学C
の授業で出てきた repère を思い出したのだ
った。

宇治分校で学んだのはもう60年も前の
ことになるが、その思い出は今も鮮やかによみ
がえってくる。